

右大脳基底核部の anaplastic glioma は治癒していた。

19. 全身転移を来した malignant meningioma の1例

森 宏・杉山 義明 (富山県立中央病院) 脳神経外科
 寺林 征・新井田 広仁
 山本 潔・北沢 智二
 若木 邦彦 (富山医科大学) 第二病理

症例は初診時51歳の女性。昭和48年3月、右下肢脱力感にて発症し、同年12月当科へ入院。左傍矢状洞部髄膜腫の診断にて、昭和49年1月5日、腫瘍摘出術を施行 (Simpson grade I)。組織は meningotheliomatous meningioma であった。しかしその6年後の昭和55年、同じく左の傍矢状洞部に再発を来し、同年7月15日、第2回目の手術を施行 (Simpson grade II)。組織は同じく meningotheliomatous meningioma であった。更にその4年後の昭和59年、今度は両側の傍矢状洞部に再発を来し、昭和59年7月12日、第2回目の手術を施行 (Simpson grade I)。組織は今回も同様に meningotheliomatous meningioma であった。そして、次第に再発までの間隔が短くなり、最後は第3回目手術施行後わずか8ヶ月後の昭和60年3月、再び両側傍矢状洞部に、中心部壊死を伴う腫瘍の再発を認め、第4回目の入院となった。髄膜腫の悪性化と判断し、まず ^{60}Co 2,000 rad を照射。その後腫瘍摘出術を予定していたが、右蝶形骨縁から眼窩内及び頭蓋外へ進展する腫瘍が新たに出現した為、手術は断念し、更に 4,200rad の照射を追加した。しかしその後、肺、肝及び肋骨への転移が生じ、昭和61年3月27日死亡した。剖検では、転移巣は副腎髄質、脾、胸腰筋にも認められた。組織像はいずれも頭蓋内腫瘍と同様の像を果しており、悪性髄膜腫の全身転移と診断された。そこで過去の組織像を再検討した所、第2回目手術時標本で既に細胞分裂像を呈しており、組織学的検討が不十分であったと思われた。また、近年再発髄膜腫に対する照射療法を肯定する報告が多く見られるようになったが、本症例でももっと早い時期に照射しても良かったのではないかと思われた。更に、本症例では行っていないが、近年注目されている BUdR による腫瘍の成長解析が、今後髄膜腫の悪性度判定、治療方針決定に有用になるためではないかと思われ、提唱した。

20. 一側半球円蓋部に再発し、また時期を異にして多発した髄膜腫の1例

小野 晃嗣・高原 淑夫 (諏訪湖畔病院) 脳神経外科
 中川 忠・柿沼 健一

髄膜腫は全摘すれば予後の良好な腫瘍と言われているが、我々は全摘したにも拘らず、再発・多発により腫瘍の発育してくる症例を経験したので、今後の治療の問題と共に報告した。症例は初診時52才、現在60才の女性。頭痛を主訴として1978年12月初診。神経学的には異常なかったが、CT で腫瘍が発見され、右 parietal の convexity meningioma との診断で全摘術 (Simpson I) を行なった。その後1982年3月右 parietal convexity、1985年6月右 frontal convexity と腫瘍が出現。前者は再発、後者は時期をおいて多発した腫瘍であり、いずれも容易に全摘 (Simpson I)。更に1年後の1986年6月には、三たび右 parietal convexity に腫瘍が出現したため、4度目の全摘 (Simpson I) を行なった。この最後の腫瘍は1982年の腫瘍の摘除跡に隣接していて、再発なのか多発なのか判断出来なかった。組織学的診断は、4つの腫瘍全て同じ angioblastic meningioma であり、悪性像はなかった。再発と多発を繰返すこのような症例では、腫瘍の多巣性をその病因と考えるならば、また腫瘍の出現する可能性は高く、これまでは外科的に摘除してきたが、今後どのように治療するかが問題となる。その方法として、我々は照射療法を考えた。一般に髄膜腫は放射線感受性がないと言われ、その治療効果も報告者によって異なっている。又、放射線による弊害も無視出来ないが、他に有力な治療手段がない現状ではやむを得ないと考えている。今後の腫瘍の発育予防、あるいは発育期間の延長を期待し行なう予定である。

21. 馬咬傷による総頸動脈閉塞症

皆川 信・岸田 興治 (信楽園病院) 脳神経外科
 小林 啓志

我々は、最近、比較的稀な受傷機転により発症した、総頸動脈閉塞症を経験したので報告した。症例は、20才男性、大学生である。馬術部に所属していた。昭和60年6月1日午前11時、馬に水を飲ませていたところ、突然馬に右頸部を噛まれた。大きな傷はなく、午後7時頃アパートの自室へ帰った。帰宅後、2~3時間後より、意識障害が出現した。2日後の6月3日、アパートを訪ねてきた友人に自室で倒れているところを発見された。直ちに某院に入院、即日当院へ転院した。来院時、頸部右側に軽い腫脹を認めた。また、その表面には擦過傷が数